同志社大学寒梅館夏祭りにおける「動物介在教育」の実践報告

中村　智帆

はじめに

近時、人とコミュニケーションがとれない、命を理解することができない、自己中心的な子供達が増え、社会問題化している。

こうした問題を教育現場において解決する様々な方途が各方面で模索されているところであるが[1]、筆者は、人と愛情や共感を分かち合うことができる動物という存在が教育現場での問題解決に資するのではないかと常々考えてきた。その思索の過程で、まさしくタイムリーに動物介在教育に邂逅し研究に至ることになった。

動物介在教育

動物飼育やふれ合いが、人の健康に良い影響をもたらすことや、子供達の共感[2]や自尊心、自己肯定感が育まれ、精神的発達や教育的に好影響を及ぼすということが海外で報告され、科学的に明らかにされるようになった。Bryant（1990）は、動物を飼育することは、人と人との関わりあいや、社会的支援の重要性、他者や生き物に対する心配りを学ぶことができ、有益であると述べている。

動物が人に与える効果についての研究は、アニマルセラピー[3]が社会的に注目されたことから始まった。本題の動物介在教育[4]であるが、太田（2008）によると「動物参加型教育支援活動」と定義されている。

寒梅館夏祭り

同志社大学では、日ごろお世話になっている町内に、少しでも大学の力やスキルを還元できればとの思いから、地域の小学生を招待し、寒梅館夏祭り[5]を実施している。

筆者は、その活動にボランティアとして参加し、動物介在教育を実施することにした。プログラム名は「動物介在教育～ワンちゃん絵画教室～うちわを作ろう！！」であり、犬の生態を観察し、子供達が感じたままを絵に表すというものである。

動物にふれるという原体験は、子供達の心に人の心をおしはかり、また痛みがわかる人間へと成長させてくれるであろう。また、すぐ傍で命あるものに触れることで、命を受け入れ、自尊心や忍耐力、命の大切さ・生命観を育てることにつながるであろうとの思いから、この体験

[1] 学校現場では文部科学省が1996年に「生きる力」を育むことを掲げ、問題解決に取り組んでいる。しかし、現在もなお、問題は解決の方途へとは至っていない。

[2] 共感性ともいう。共感には、感情移入（sympathy）と思いやり（empathy）の2種類がある。

[3] アニマルセラピーとは、造語であり、日本では次の2つを指し示している。それは、アニマル・アシスティッド・セラピー（Animal Assisted Therapy）と呼ばれ、動物介在療法と翻訳されているものであり、医療の資格を持つものが治療を目的とし、治療計画、実施、評価をおこなうものである。つぎに、アニマル・アシスティッド・アクティビティ（Animal Assisted Activity）と呼ばれ、動物介在活動と翻訳されているものである。これは、動物とのかかわりやふれあいを目的としたものであり、ボランティア活動としておこなわれることが多い。

[4] アニマル・アシスティッド・エデュケーション（Animal－assisted EducationまたはAnimal Assisted Education）と呼ばれるものを日本に則した形で翻訳したものであり、広義のアニマルセラピーとは区別されている。明確な定義などは今のところない。

[5] 2010年8月28日に実施された。

が子供達の心に印象深く残るように考えた[6]。

プログラムは３回実施し、適宜、動物の体調を配慮しながら十分な休憩をとった。動物は、子供達に慣れた犬を用いた。プログラムを開始するに当たり遵守したことは、犬にふれる前後に、アルコールによる手指の消毒をおこなうことである。犬に直接ふれない場合も、同様である。これは、お互いが、安全にプログラムを実施することと、動物に対する適切な情報を伝えるためである。次に、注意事項の説明をおこなった。絵を書く、クレヨンと色鉛筆は数組用意し、自由に使えるようにした。

プログラム開始

犬を介在させずに注意事項の説明をした場合は、子供達は、筆者に見向きもせず、口々に話をし、説明を聞いていないものが多かった。次に、犬を抱きながら「だいすけ[7]を脅かしてはいけないので、この声が聞こえる位置に、皆さんが考えて座ってください」と説明すると、静かに筆者の周りに集まった。次の会においても同様であった。３回目の会では、最初から犬を抱きながら説明した。すると、一度で静かに筆者のまわりに集まった。

絵を書くに際し、参加したすべての子供達が、犬に興味を示し、じっくりと観察していた。さらに、犬を自分の方に振り向かせるためには、どのような言葉をかけたらよいのか子供達自身が考え、言語を使わないコミュニケーションを学んでいた。何度も挑戦したあと、振り向いてくれたときの感動はひとしおであったようだ。人数が増えると、クレヨンや色鉛筆を独占するものがいたが、注意をせず見守っていた。すると、独占していた子供達が、動物とのふれあいのなかで、皆と共同で使うように変化していった。その子供に終了後、何故、色鉛筆やクレヨンを一緒に使うようになったのか聞いてみると、「だいすけくんは、みんなに優しくしてくれた。だから、皆、だいすけくんが、好きなんだと思う。私も、皆と仲良くしなくては駄目だなあと思った。だから、隣にいた子に、一緒に使おう、って話した。先生、だから、隣と隣にいた知らない子ともお友達になれた」といって満面の笑顔を見せてくれたことは印象的であった。その後も、プログラムの初めには独占するものもいたが、動物とのふれあいをおこなうに従って、互いのことを考え、仲良くクレヨンや色鉛筆を使っていた。

高学年の子どもたちは、低学年の子どもたちを気遣う様子も見受けられた。さらに、動物に対しても、心配りができる子どもたちが多かった。それは、「だいすけくんが、疲れたらかわいそうだから、静かにしてあげて」と、次のプログラム開始を待つ子どもたちに話している場面が何度かあった。

数人であったが、俳句を作ったといって、犬に読み聞かせるものもいた。それは、「だいちゃん　今日はありがと　ごくろうさん」など、感謝の気持ちをこめているものが多かった。さらに、大勢の子供達が、犬のために歌を作ってくれ、それぞれが歌いながらうちわづくりをしていることには驚いた。歌の内容は、「大好きだいちゃん、大好きだいちゃん、だいちゃんの名前は、だいすきちゃん」である。音階については、筆者にはあまり分からなかったが、子どもたちの笑顔と歌声は、筆者を感動させるものであった。子供達の多くが、帰りに「だいちゃん、今日はありがとう」、「だいちゃん、また来年ね」など、別れを惜しみつつ、礼儀正しく挨拶していく姿を見ると、動物が秘める力の多様さを感じた。

おわりに

「クレヨンや色鉛筆は、皆で使おう」、動物を介在したことで、子供達の間に、仲間意識が生まれ、共通認識のなかで、お互いを尊重しあい、思いやりの心が芽生えたことで、「共通善」の意識がうまれたことは明らかであった。

しかし、動物介在教育を実施するに当たり、マイナス面も考えておかないといけない。メルスンが指摘するように、不適切な方法での動物とのふれあいは、子供と動物との複雑な関係をつくり、動物が虐待の対象になることがある、また小児期の動物虐待と成人期の暴力とが関連

[6] 画用紙に絵を書くのではなく、夏の思い出となる世界で一つのオリジナルうちわを製作する
[7] 犬の名前。

することなどが指摘されている。これらの功罪を考慮しながら、大人や教師が動物を介在させながらどのように教育プログラムを設計し運営していけば子供の生活が豊かなものになるのか、また自然としての動物に我々はどのように関わっていけばよいのか、さらなる研究が必要であると考えている。動物が子供達の心の成長や教育において良い影響を与えるためには、正確な知識を持った指導者が必要である、ということである。

思うに、動物の利点の一つは、感情表現を体全体で表すこと、子供の過去や見た目で判断することは決してないことである[8]。動物は、子供達が社会的なかかわりをもち、素直にコミュニケーションできるように成長していく導きの使者ともなれるのである。

日本においては、動物介在教育の研究はまだ始まったばかりである。これからも研究を志す者として、「心を持った研究者」になれるよう研究に励みたい。

謝　辞

本稿の実践にあたり、御尽力いただいた同志社大学今出川校地学生支援課の近藤様、関係各位の皆様に、この場をお借りし感謝申し上げます。

【参考文献】

・Bryant K. Brenda, The richness of the child-pet relationship : A consideration of both benefits and costs of pets to children, Anthrozoos, Vol.3, Issue.4, 1990, pp.253－261
・メルスン・F・ゲイル『動物と子どもの関係学－発達心理からみた動物の意味－』ビイング・ネット・プレス, 2007年
・森祐司・奥野卓司編著『ヒトと動物の関係学第３巻：ペットと社会』岩波書店，2008年

寒梅館夏祭り（2010年８月28日）にて

筆者撮影

図１　サークルの中に入っている犬を観察

図２　子どもが作成したうちわ(低学年)

図３　犬の肉球をじっくり観察

図４　犬を自由に歩き回らせての観察

図５　子どもが作成したうちわ（高学年）

図６　子どもが作成したうちわ

[8] メルスンは、『動物と子どもの関係学－発達心理からみた動物の意味』の中で、「動物たちはカルテを読まない」と表現していた。